

ひょうご 水百景

No.71 生田川（神戸市中央区）

～山津波が暗渠を閉塞、濁流は旧河道を流れ下る～

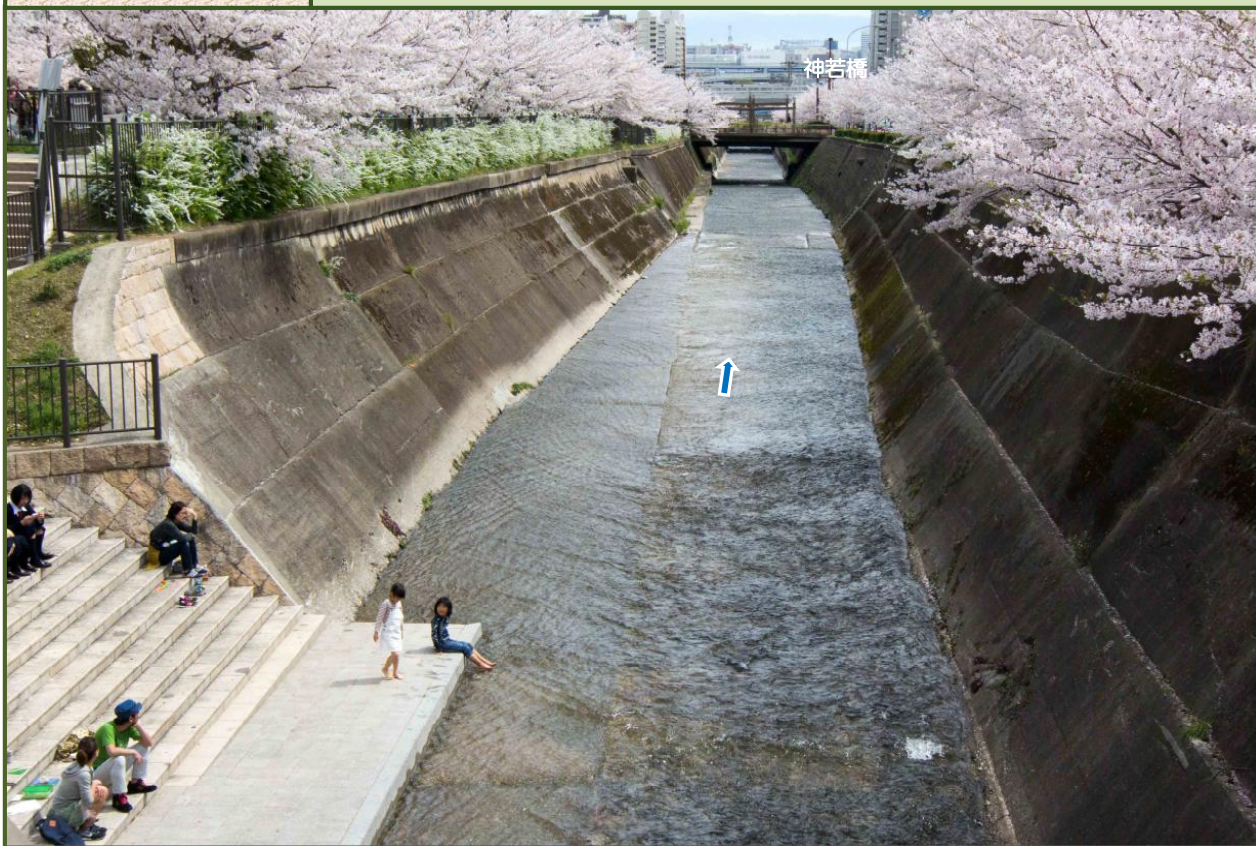


写真-1 布引橋から生田川下流を撮影（平成26年4月）

■ 交通・衛生対策や土地の有効活用から新生田川を暗渠化

大正9（1920）年元旦の大阪毎日新聞に、当時の神戸市長・鹿島房次郎が下記のようなコメントを寄せています。

「生田川の処分は、都市計画の一部に加えてこれを暗渠とし南北横断道路に改めたいと思う。しかも、この生田川を海岸の川尻まで全部暗渠にすべきものなるや否やは十分考慮を要すべき問題で、余の希望としては港湾設備の一部として川尻のある区域は暗渠とせず、川床を掘り広げ水深を深めて運河設備を施し小型船の繋留場に使用したい。

神戸港の繁栄と共に大船の繋船壁を増築する事は素より必要とする所であるが、また小船の繋留場（避難場）の建設も忘るべからざる事である。

神戸港第二期工事においては政府もこの点に注意を払っているが、市としても将来十分の施設すべきものであろう。」（コメント中の生田川に関する部分を抜粋したもので、原文を少し読みやすく変えています）

明治4（1871）年に付け替えられた新生田川（正式名称は「生田川」）ですが、普段から流量は少ない上に、明治33（1900）年生田川上流に竣工した布引貯水池に貯留されることでさらに少なくなり、付近住民がゴミを捨てることからいわゆる“ダブル川”状態で、著しく町的美観が損なわれていました。

加えて、大正12（1923）年に起きた関東大震災の経験から、都市における避難空間の確保が必要といった有識者の声もあって、衛生問題の解決と地上交通の円滑化、それに防災対策を含めた土地の有効活用の三点から暗渠化することとなり、大正14（1925）年の市議会において新生田川の暗渠・遊歩道化および埋立



写真-2 暗渠化された新生田川上の遊歩道（神戸市提供）

計画が付議され可決の運びとなりました。この頃は、河川を暗渠化することが治水上大きな危険を伴うということがあまり認識されていなかったようです。

■ 暗渠化により流下断面はさらに縮小される

暗渠断面の決定に際しては、生田川の流路延長を 1,570 間（≒2,854m）、洪水到達時間を 2 時間として、明治 36（1903）年以降の 2 時間連続雨量の最大値 35mm/h を基に、両岸市街地からの流入量も加算して計画流量を 85m³/s としました。この流量が流下可能な断面に若干の余裕を見込んで暗渠断面を決定しています。

ちなみに、現在は上流部でも約 260m³/s の流下能力が確保されています。

しかし、元々の生田川は、加納町交差点付近で川幅が約 60 間（≒109m）、遊砂地を含めると約 180 間（≒327m）もあり、それが付け替えられて河床幅 18m に縮小され、さらに暗渠化によって下記のような窮屈な断面になってしまったわけです。『神戸市水害誌』によると、暗渠は 3 区間に分けて断面が設定されています。

- ① 暗渠入口～二宮町一丁目：内法幅＝3.1m 深さ＝3.3m
- ② 二宮町一丁目～阪神国道（国道 2 号）：（下図参照）内法幅＝3.6m 深さ＝2.5m 2 連
- ③ 阪神国道より下流：1 連（『神戸市水害誌』には「1 連」の記述しかありません。）



写真-3 暗渠入口部（『神戸市水害誌』から引用・加工）

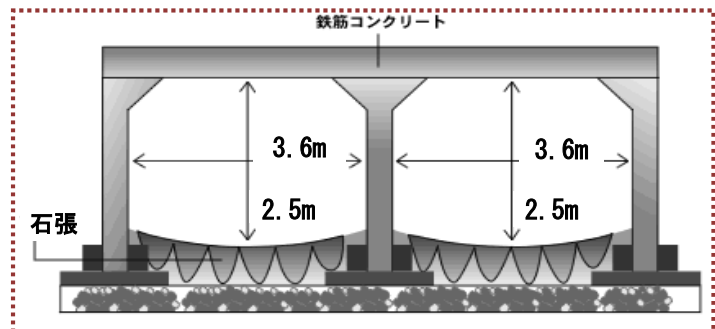


図-1 二宮町一丁目～阪神国道の暗渠断面（神戸市 HP から引用・加工）

暗渠化される区間は、布引下の久方橋（馬淵）から国鉄小野浜臨港線に至る区間（L≒1,550m）で、暗渠部の埋め立てについては、郡市境から三宮駅に至る国道の切下げ工事に伴い発生する土砂を使うことになりました。

暗渠化工事は、都市計画事業※1・新生田川筋街路拡築工事の一環として昭和 4（1929）年 8 月に着工し、同 5 年（1930）9 月に完成、埋め立てに要した土量は約 103 千 m³でした。昭和 7 年度（1932）末までに、埋立地の中央部（幅 24m）に樹木 5,600 本余りが植えられ、その両側には 4m の歩道、6m の車道が設けられました。

※1 都市計画事業：神戸市の都市計画については、大正 8（1919）年の都市計画法施行以降、都市計画兵庫地方委員会が設置され、この年に第 1 期道路建設事業に着手（大正 12 年完成）、大正 11（1922）年 4 月に都市計画区域を設定、大正 13（1924）年に第 2 期道路建設事業に着手、そして、昭和 3（1928）年に第 3 期道路建設事業に着手している。生田川の暗渠・遊歩道化は、海岸部と山手を結ぶ道路建設が必要との観点から、第 3 期に位置付けられた。

■ 山津波で暗渠入口が閉塞、溢れ出た濁流は生田川旧河道を流れて三宮へ

新生田川の暗渠化から 8 年目の昭和 13（1938）年、暗渠化したことを後悔する事態が訪れます。下の写真-4 は、阪神大水害の起きる 1 年前、昭和 12（1937）年の三ノ宮駅南の風景です。ここが、広域かつ大規模な山津波による濁流に洗われ、一面が土砂で埋め尽くされたのです。

6 月の神戸地方は梅雨の長雨が続いていましたが、そこへ 7 月 3 日から 5 日にかけて台風刺激された梅雨前線が六甲山系周辺に集中豪雨をもたらします。3 日に 60mm、4 日に 132mm の大雨が降り、（神戸海洋気象台）飽和状態に達していた六甲山系の風化花崗岩は、5 日 13 時 20 分までに降った 269mm の豪雨により、至る所で崩壊を起こし、巨大な岩石や大量の土砂、樹木を押し流し、“山津波”となって市街地に押し寄せました。

芦屋から須磨までの全ての河川が氾濫し、土石流が流れ込んだ市街地は泥の海と化し、神戸市域では、死者616名、被災家屋89,715戸にも及ぶ大災害となりました。

新生田川においても、水害当日の7月5日は早朝からバケツをひっくり返したような雨が降り、上流の芋川（おかわ）谷でまず山崩れが起こり、次いで布引貯水池の下流でも山崩れが発生しました。

山肌はみるみる姿を変え、暗渠はたちまち土砂と流木でふん詰りとなって、溢れ出た濁流はものすごい勢いで滝道（市街地から布引の滝への道）市電線路（旧生田川の河道跡）を流れ下り加納町3丁目の交差点へ、さらに阪急三宮駅東口、省線（現・JR 東海道本線）のガード下をくぐって南下し、三ノ宮駅前広場一帯を濁水の海と化し、阪神三宮駅の地下ホームにも流れ込みました。暗渠の入口付近から加納町3丁目までは一面河原と化し、5.0m～1.5mの土砂が堆積しました。



写真-5 三ノ宮駅付近（『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』から引用・加工）



写真-4 災害前（昭和12年）の三ノ宮駅前付近（『新修神戸市史・産業経済編Ⅲ』から引用・加工）



図-2 阪神大水害による被災区域（『生田川物語』から引用）

■ 大水害復興の苦心～神戸市復興部長 富田恵四郎氏の回想

当時の新聞記事を「神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫」で見つけました。その中に、昭和14（1939）年6月16日から29日に神戸新聞に連載された神戸市復興部長・富田恵四郎氏の回想記事がありました。

おそらく、市職員が災害現場で直接目にしたことの報告なども踏まえて、災害復旧を陣頭指揮した方がほぼ1年後に書いたものと思われ、とても臨場感があります。

ここに生田川関連の部分を選抜して掲載します。（一部現代文に書き換えています）

新生田川の暗渠入口が閉塞、濁流は滝道（旧生田川跡）を流下し三ノ宮駅へ

新生田川は神戸市の中心を貫く川で、被害はその区域において全く人々の予想以上に広範囲にわたり、しかも濁流は国際道路として誇る滝道から税関までの国道を流心として流れたのである。最も重要な部分を襲われたため、東西の交通は途絶し混乱の状態は全く筆舌に尽くせないものであった。

浸水面積は実に1,840千㎡、堆積土砂量236,800m³、堆積区域462,400m²で、浸水面積において市内河川中最も被害甚大であって、全市の浸水面積の30%はこの川の影響であった。



写真-6 7月5日加納町交差点付近で濁流に流される市電
（『神戸市水害誌』から引用・加工）



写真-7 三ノ宮駅前そごう付近の濁流
（神戸市提供）

新生田川は二つの支流をもっていて、東の谷が芋川谷溪谷、西が布引溪谷で、この二つが合流して新生田川となり、合流箇所から大暗渠となり国道を横切って海に注ぎ、暗渠上は遊歩道となり、緑の植樹帯は市街地の中に稀なる市民のオアシスとなっている。上からのぞくとゾッとする程深い谷であった芋川谷も、上流から激流となって強襲して来た土砂、流木、岩石が一瞬にして谷を埋め尽くしたのみならず、はるか高い南側の民家の床上まで埋め、水は家の屋根を渦巻いて流下、布引溪谷よりの出水と合して暗渠入口を数秒にして閉塞し、芋川谷方面の水勢が強いため、暗渠入口が閉塞するや南に流れず西へ押し切り、布引鉱泉会社、ホテル等の人家工場を一呑にし、川崎邸の庭園をひとなめにして横切り、市電筋を通り、加納町交差点付近の沿道の人家・人命を呑みつつ飛沫をあげて流下し、走行中の電車を押し流して人家の中に押し込み、自動車、バス、通行人に避難の余裕も与えず一気に三ノ宮駅付近に殺到、滝道交差点に到るや、阪神電車・三宮駅地下ホームの昇降口より地下に爆音を立てて流入し、助けを求める人々の悲鳴を外に寸時にして土砂を以って埋め尽くし、国際道路上の自動車、電車を立往生、あるいは埋め、流しつつ海へ向かって流下したのである。全く言語を絶する暴威を揮ったのである。



写真-8 加納町歩道橋から JR 三ノ宮駅方向を望む



写真-9 三ノ宮駅前付近（『ふるさとの思い出写真集神戸』から引用）

■ モノローグ

『六甲山災害史』によると、昭和 13（1938）年は、前年 7 月に起きた盧溝橋事件をきっかけに勃発した日中戦争の戦時下にあったため、「県当局は中央の意を奉じてか、この災禍を新聞等に喧伝することは、事変下、内外、特に支那に悪用されるを恐れ、写真の撮影を禁じ、また新聞記事を拘束していたために、東京をはじめ全国にわたってこの惨禍を知る者少なく、写真撮影等も比較的少なかった」とあります。ただ、復旧作業に関して、政府は、「事変下において戦争目的のため、あらゆる民需を抑制しているが、今次の災害に対しては国の連帯責任として救済すべきで、必要な物資は直ちに制限を緩和し、また今後の陳情等についても虚心坦懐に聞くべし」（『神戸市水害誌』）との方針で、ガソリンや木材、水道鉄管など復興資材の調達にも特別の配慮がなされたそうです。

また、“喧伝”しなくても、これだけの災害ですから瞬く間に知れ渡り、災害直後から市外、県外から大勢の応援部隊が駆けつけて懸命の復旧作業が始まります。

地元も、暑い日差しの中、町会、在郷軍人会、青年団、婦人会などが勤労奉仕団を組織し、市内の学校も休校にして生徒も一緒になって土砂や流木の撤去作業に汗を流します。

懸命の作業の甲斐あって、およそ3ヶ月後には見た目だけではありますが、概ね災害前の姿に復旧したそうです。その復旧については、次号に続きます。

こんなことを書いてみると、阪神・淡路大震災の復旧に際し、全国の自治体から応援部隊が駆け付けていただき、大勢のボランティアが救援の手を差し延べてくれたことを思い出します。

【参考資料】

- 1 『新修神戸市史・産業経済編Ⅲ 第三次産業』 神戸市 平成 15 年 3 月
- 2 神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 道路 (03-158 神戸又新日報 1927.6.4) 都市 (10-116 大阪朝日新聞 1927.6.4)
- 3 『六甲の川物語～みんなで語り、伝えよう！生田川物語』 国土交通省六甲砂防事務所 平成 25 年 1 月
- 4 『六甲山災害史』 兵庫県治山林道協会 平成 10 年 8 月
- 5 『ひょうご歴史余話～濁流の記憶』 黒部 亨
- 6 『神戸市水害誌・附图』 神戸市役所 昭和 14 年 7 月
- 7 『葦合ものがたり』 葦合区役所 昭和 52 年 3 月
- 8 『生田川、フラワーロード』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

歌碑のみち（布引三十六歌碑）

名勝「布引の滝」は、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人たちが訪れ、多くの名歌が詠まれています。明治の初め頃、「花園社」という市民団体が、滝の周辺を布引遊園地とし、平安時代から江戸時代にかけて詠まれた布引の滝の名歌の碑 36 基を建てました。その後散逸してしまいましたが、神戸市が順次復旧を進め、平成 19 年にすべての歌碑を復旧しました。布引の滝から下流の生田川沿いに歌碑が設置され、「歌碑のみち」と呼ばれています。右の写真は、布引橋近くにある藤原為忠の歌碑です。

うちはへて 晒す日もなし布引の 瀧の白糸さみたれの頃



写真-10 藤原為忠の歌碑

※発行：平成 29 (2017) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.71

改訂：令和 8 (2026) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.71